須藤由希子　《植え込み３》　2007

普段は気にもとめず、通り過ぎてしまうことの多い「植え込み」が、地面に近い低い場所から描かれています。まるで小さな動物の目線になったかのような､いつもとは違う景色が新鮮です。鉛筆で隅々まで細かく描き込まれるなか、一部の花だけが赤く色を塗られています。もし画面のすべてが白黒やカラーだったら、この花には気づかなかったかもしれません。須藤さんが身近な植物を大切に思い丁寧に描いている様子や、ふと目を奪われた花の色など、その心の動きまで静かに伝わってくるようです。



ガイドスタッフＫ

音声コード
Uni-Voice

金氏徹平

《White Discharge（建物のようにつみあげたもの）#4》

2009

「この白いかたまり、何だろう？」私はまず、そう思いました。あなたには何に見えますか？ 塔？ 岩山？ それとも、まったく違うものでしょうか。

作家の金氏さんは、雪に包まれた街で、いろいろな物が一つの景色になっている美しさに心を動かされたそうです。この作品も、よく見ると一つのかたまりに見える中に、たくさんの物が集まっています。

私は、最初は大きな塔のように見えましたが、近づいてよく見ると、石鹸のトレイやゲームのキャラクターの人形が隠れていることに気づきました。全体を見る楽しさも、パーツを見る楽しさも、味わってみてください。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフH

ロイ・リキテンスタイン
《ヘア・リボンの少女》 1965

マンガの一部だけを拡大したような絵。分かりやすくてインパクトがありますね。実は、この絵は全て手描きです。肌の部分を見ると細かい水玉模様になっています。新聞などの機械印刷の技法をまねて描き出しているんです。1940 年代から美術を学び、ピカソら過去の巨匠に憧れながら創作の試行錯誤を続けたリキテンスタインは、商業的な大量印刷の技法を自分の絵のスタイルとしました。構図を計算し、日常にありふれた印刷物のイメージが拡大して丹念に描かれることで、革新的な作品が生み出されたのです。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフT

寺内曜子作品について

一枚の紙、一枚のシート、その両面には違った色が塗られていて、どちらが表でも裏でもない二つの色が同時に見えています。物事には表と裏があるといわれるし、日常生活で表裏を感じることがあるでしょう。一連の作品をご覧になってそんなことを思い浮かべた方もいるのでは。
寺内は、「表と裏、善と悪、うつくしさとみにくさ、などの二つの対立は初めからあるのではなく、私たち人間が作り出している。本来、対立はないことを示すために作品を制作している」と言います。
今日は、作家の言葉を手掛かりに鑑賞してみませんか。



ガイドスタッフＳ

音声コード
Uni-Voice

野村　仁 《重心の移動》 1972

ひたすら見つめると普段見えないものが見えてくる可能性がある、と野村仁は自著で語っています。こちらは、作家自身が前に倒れる瞬間の映像フィルムを印刷した作品です。左上からスタートして下へ、次に右上へと続きます。よく見ると、人が倒れる時いつ手を出すのか分かりますね。

野村は本作品と同時期に「見るもの全部を写す」ことを始め、10 年で計 120 冊の Photobook を制作しました。そしてわかったのは「人間は全部を写すことはできない、見ることには限界がある」でした。10 年見つめたからこそ、ですね。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ M

デイヴィッド・ホックニー
《竜安寺の石庭を歩く、1983 年 2 月 21 日、京都》 1983

京都・龍安寺でホックニー自身が撮影した、100 枚以上の写真からなるフォト・コラージュです。
画面に写る足元は作家本人のもの。ホックニーは移動しながら撮影を行い、一つの風景を複数の視点から捉えています。
私たちは普段、移動するとき、さまざまな角度から景色を見たり、音を聞いたりして周囲を認識しています。この作品は、そうした人間の自然な感覚のあり方を表現しているようです。そして同時に、アート作品もまた一つの見方にとらわれず、多様な視点から鑑賞できることを伝えているかのようです。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ M

大岩オスカール 《戦争と平和》 2001

左右の絵を見比べてみましょう。同じ場所を描いていることが分かります。ずいぶん印象が違いますね。夜と昼の違いだけでしょうか。左の絵をよく見ると闇に隠されているものが次第に見えてきます。こちらは「戦争」を描いています。右側は「平和」を描いています。２つの絵の家を比べてみましょう。戦争のただなかにある家には明かりが燈(とも)り、家族の生活が想像できます。平和を描いているはずの右の絵の家は何かに蝕(むしば)まれているようで生活の様子が見えません。いったい何があったのでしょう。「戦争」とは。「平和」とは。考えさせられます。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフI

佐藤慶次郎 《ススキ〜波〜》 1989

風にそよぐススキのように、ゆらゆらと揺れる13本の軸。離れたり近づいたりを繰り返しながら、軸を上下する球。とても不思議なこの現象は、土台に取りつけられたモーターの磁石と振動が、軸を通じて球に伝わることで生まれるそうです。ところでなぜ「波」？ この世界は、光・電波・音といった「波」であふれています。佐藤慶次郎は、作曲家として制作を開始後、次第に音が発生する構造そのものに着目していきました。この作品も、私たちの周りにある様々な「波」が生み出す不思議な現象が詰まっていると思いませんか？

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフF

アルナルド・ポモドーロ
《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフI

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなと。それは、それでよかったなと。

音声コード
Uni-Voice

鈴木昭男

《道草のすすめ -「点 音（おとだて）」and "nozo mi"》

2018-19

《点 音》は美術館内と敷地内に点在する 12 個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある 5 つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれません。が、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点 音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12 の《点 音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

文谷有佳里　「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019 年 7 月 24 日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！
黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズミカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ O

音声コード
Uni-Voice

デイヴィッド・ホックニー
《木、1986 年 11 月》 1986

なんだかバラバラな展示ですね。赤い木の枝や幹、緑や青の葉っぱ、茶色の土に黒い根っこが一枚ずつ。でも、一歩下がって絵と絵を繋ぐように見てみるとどうでしょう。そうです、8 枚で 1 本の木になりませんか？
事務用のカラーコピー機が普及し始めた1980年代、作家は黒、赤、青、緑に特注の黄色のトナーを使い、一色ずつ印刷する方法で新しい版画を生み出しました。名付けてホーム・メイド・プリント。
右下の作品は私たちもよく見る白黒コピーです。カラーコピー機でこんな版画ができるなんてびっくり、作家の発想に脱帽です！

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフＴ

クロード・ヴィアラ　《無題》　1979

「絵を額に入れ壁にかけると、重い装置になってしまう、絵画をもっと自由に捉えたい…」と願った芸術家たちの中心にいたのがクロード・ヴィアラでした。彼が好んだ考え方が「絵の具と動物の皮をもち歩く」原始社会の方法。折りたたんで持ち運べ、移動でき、シンプルだけど効果的なもの、そう！今みなさんの前にある作品の画面＝広げたテント、は正に動物の皮の代わりに彼が選んだものでした。ではひたすら並ぶ同じ形は？実は作家からの解答はなく、見る人によって何にでも成り得るものなのかも知れません。旅に出たくなる、そんな作品です。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

小林正人 《この星のモデル》 2016

型にはまるという言葉は良い意味では「基本を身につける」、良くない意味では「個性がなく面白みがない」という風に使われます。作者の小林はキャンバスは四角くて、そこに筆で絵を描くという「絵画のルールにはまる」ことから自由になりたいと、キャンバスを木枠に貼りながら直接手で描くという独自の方法で、絵がどうしたら観る人の心を揺さぶるものになるのかを探し続けています。小林が考えながら作品を作り上げていく、つくる過程そのものや、激しい感情までが伝わってくるようですね。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフＹ

石田尚志 《海坂の絵巻》 2007

2007 年、この作品、《海坂の絵巻》は描かれ、3 週間にわたる制作の過程が、1 本 1 本の線、ひとつひとつの点に至るまで、カメラにより克明に記録されました。20 年近くがたった今も、長さ 9 メートルの絵巻そのものは、制作時の姿をとどめています。一方で、海面上を超低空で飛んでいくような映像では、点が突然現れたかと思うと、繁茂する植物のような曲線がどこまでも伸びていき、水分を含んだ墨が紙に吸われていく光景が繰り広げられます。作家が筆を置いた時点で完成した絵巻と、制作の過程を再現し続ける映像との対比が鮮やかな作品です。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ K

多田美波　《相 (Phase) 》　1989

まわりをゆっくり一周してみてください。突然自分が映ってびっくり。これ、ただのガラスじゃないんです。多田美波が 1968 年に制作した皇居新宮殿のシャンデリアに求められたのは100年の耐久性。それをきっかけに多田はガラスを勉強しました。約 20 年後、ガラスという素材を熟知した作家が制作したのがこちら。ビルの外壁などに使われる熱線反射ガラスを使用し、屋外設置も可能です。実際、当館に来る前は海辺に置かれたことも。潮騒を聞きまばゆい太陽を浴びたガラスはこの場所でどんな光を放つのでしょう。



ガイドスタッフ M

音声コード
Uni-Voice

宮島達男
《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ それは永遠に続く》 1998

数字が碁盤の目のように並び、それぞれ・さまざまな速度で絶え間なく変化しています。無機質なデジタルカウンターの集まりでありながら、１～９と刻み一旦消えるのを繰り返す赤い光は血の通った一つひとつの生命のように見えます。一面に広がるその様を眺めていると、社会の縮図のようにも感じます。
９と１の間に、闇が現れます。それは「0」と名付けられることはありません。生命の終わりなのか、新たな始まりの前なのか、あなたにはどう見えるでしょうか。この部屋で、本作品をじっくり見つめながら思いを巡らせてみてください。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフＴ